

明治25年、滋賀県に生まれた高橋貞太郎は、三高を経て、東京帝国大学工科大学建築学科に進んだ。大学では佐野利器に学び、卒業時には成績優秀につき恩賜の銀時計をもらっている。この頃、佐野は学生に大きな影響を与えていた。高橋も大学卒業後、滝川鉄筋コンクリート工務所、内務省、宮内省、復興建築助成株式会社を渡り歩いたが、そこにはすべて佐野が関係していた。また、積極的にコンペにも参加して高成績をあげており、学士会館、日本生命館などは初期の代表作となっている。その後、帝国ホテルの犬丸徹三との邂逅を得て独立。以降はホテル建築の仕事に恵まれ、やがてはその道のスペシャリストとして、上高地ホテル、川奈ホテルなどの名作を、今に残している。そして犬丸の絶対的な信頼を得て、帝国ホテル本館の解体を伴った新本館の設計を委嘱された。高橋は、圧倒的な保存支持の声の中で孤立しながらも、ひたすら設計に精力を注ぎ込んだ。今号では、佐野との関係や、帝国ホテル取り壊しの側面ばかりが強調されてきた高橋に、別の面からスポットを当てた。新しい高橋貞太郎が、ここに姿を現した。

# 高橋貞太郎

T e i t a r o T a k a h a s h i



写真：『北江人要覧』(北江人協会 1991)

卒業設計「学生会館」詳細図「部分」、1916  
 [所蔵：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

## 高橋貞太郎を巡る言説

高橋貞太郎を最も社会的に有名にしたのは、あの帝国ホテル「ライト館」解体後の「新本館」[1970]設計者だったことではないだろうか。彼の晩年における建築家としての行動は、建築界を敵に回すのに十分だった。一方で、敵に回しても帝国ホテル新本館の設計に取り組んだ高橋の人生を真正面から扱った論考は、ほとんどない。なぜなら高橋の晩年のかたくなな姿勢は「社会的存在としての建築の芸術的価値(中略)をまったく無視している」<sup>[1]</sup>、「建築家としては公正ではない」<sup>[2]</sup>という評価を導き出し、それが高橋の建築家人生まるごとそうかのような、建築家としての資質や自律性が欠け、資本に盲従した印象を与えるからである。ライト館の保存を推進した建築史学界にもたらした「敗北経験」もこれを揺るぎないものにし、佐野利器との関係は「子飼いの面ばかりをクローズアップしてきた。彼が没して40年。高橋を見直してみたい。

## 日本を代表するホテル建築家

高橋は、日本を代表するホテル建築を手がけてきた。戦前には、今も現存する著名なゴルフのための「川奈ホテル」[1936]を筆頭に、「上高地ホテル」[1933]、「赤倉観光ホテル」[1937]、京城の「半島ホテル」[1938]などがあり、戦後も「芝パークホテル」[1956]、帝国ホテル新館二棟(ライト館解体以前の増築部分のこと)がある。さらに「新大阪ホテル」[1935]や名古屋観光ホテル、松島の「ニューパークホテル」[1939]では基本設計や設計アドバイザーもこなしている。いわば戦前戦後にまたがるホテル建築のスペシャリストだった。その事業背景に目を転じると、大半に帝国ホテルの経営やその関与がうかがえ、そこには高橋を重用し続けた犬丸徹三<sup>[3]</sup>の姿があった。犬丸は世界中のホテルを渡り歩いた後、帝国ホテル支配人、社長に上り詰めた人物である。フランク・ロイド・ライトによる帝国ホテルの設計に心酔した林愛作<sup>[4]</sup>とは対照的に、犬丸はライト館に冷徹だった。林は帝国ホテルを去った後も甲子園ホテルの設計に遠藤新<sup>[5]</sup>を起用してライトの幻影を追い求めたが、犬丸は早々とライト館の不具合を指摘した<sup>[6]</sup>。そんな折、犬丸が新大阪ホテルの建設計画に関与することとなり、その設計者を求めて高橋に出会ったのである。

## 学生会館、犬丸徹三との出会い

犬丸と高橋の出会いは、神田神保町の「学生会館」だった。学生会館は帝国大学卒業生のための建築で、懸賞競技設計を経て昭和3年[1928]に高橋の設計により竣工していた。学生会館の斜向かいに東京商科大学(現・一橋大学)同窓会による如水会館があったが、犬丸は同大のOB。ここを訪ねた際、向こうに見える新築の学生会館に気を取られ館内見学をしている。帝大卒の名士の意見が飛び交ったであろうその計画を、これほど手堅くまとめ上げたのは一体誰なのか。犬丸は設計者の名を求めて高橋に辿り着いたのである。確かに学生会館は集会室や食堂だけではなく宿泊室もあったから、犬丸は図らずも「ホテル建築」としての可能性を見出したに違いない。

犬丸の回想によると、高橋はその時、「ホテル建築に関しては、経験も多からず、さほど精通してはいなかった」<sup>[7]</sup>と述べている。確かに高橋の設計経験だけでは犬丸の構想には対応できなかったかもしれない。そこで2人は帝国ホテルの「屋根裏の四百一号室」に籠居して新大阪ホテルの設計を進め、特に来客とスタッフの効率的な動線計画や留意事項について徹底的に検討し、ここで作図までしたという。場所が場所だから、きっと犬丸はライト館を批判的教材として活用し



上高地ホテル | 1930年代の国際観光政策により最初に開業した外国人向け「国際観光ホテル」。同時に日本で初めての本格的「山岳ホテル」として設計がなされている。立案過程では政策関係者、山岳家、事業を推進した帝国ホテル会長・大倉喜七郎らの意見を採用[写真:『建築雑誌』1933.11]



赤倉観光ホテル | 1930年代の国際観光政策による「上信越国際スキー場」のひとつ。玄関を来客用とゲレンデ用に分け、スキー道具のロッカー、乾燥室、手入れ場、靴置き場を備え、かつ温泉にも入浴できる「スキーホテル」の典型となった。大倉喜七郎はここをこよなく愛したという[写真:赤倉観光ホテルパンフレットより]



半島ホテル | 2-5階は貸事務所、6-8階が客室となっていた。別名、半島ビルディング。後のロッテホテル・ソウル[写真:『朝鮮と建築』1938.6]

[1] 「座談会:帝国ホテル旧館の保存について」の中の池辺陽の発言[『建築雑誌』1967.11]  
 [2] 桐敷真次郎「帝国ホテル旧館の保存問題と保存運動の経過」『建築雑誌 建築年報』1968.5  
 [3] 犬丸徹三[1887-1981]  
 東京高等商業学校卒業後、長春ヤマトホテルを皮切りに世界のホテルを渡り歩く。1919年、帝国ホテル副支配人。その後、支配人、社長  
 [4] 林愛作[1873-1951]  
 若くて渡米し、1909年に帝国ホテルの支配人として招かれる。ライトとの親交が深い。ライト館の工事延期の上に、火災の責任をとって辞任  
 [5] 遠藤新[1889-1951]  
 [参照:『INAX REPORT』No.181]  
 [6] 犬丸徹三は1924年に建築学会の通常大会で「ホテル経営と建築」と題して講演を行っている。そこではホテル経営上の要求を建築設計者は丁寧にみ取る必要があると、ライトの設計した帝国ホテルについては「パブリックルームに於ては宜しいが、プライベートルームが悪い、御客様に総てお前斯うしろ、あしうると命令してある」と否定的に述べている[『建築雑誌』1924.6]  
 [7] 「ホテルと共に七十年」犬丸徹三[『展望』/1964]



#### 日本生命館(現・日本橋高島屋)

上——竣工時[所蔵:高島屋]/下——現在

高島屋が入居予定の懸賞競技設計により、高橋の案が当選した。募集要項で和風意匠が求められたため、ルネサンス様式を基調にしながらも、軒蛇腹の垂木や天井のデザイン、柱頭飾りの細部意匠や屋上庭園など、そこかしこに和風要素が現れる百貨店建築となっている。コンペを主催した日本生命の役員に建築家・片岡安がいたため、実施設計段階で片岡が設計顧問となった。後に増築計画を行った村野藤吾も高橋を設計顧問にしている

ただらう。こうしてまとめ上げられたのが新大阪ホテルの設計だった<sup>[8]</sup>。

その後、犬丸との関係は晩年まで続いたわけだが、決して犬丸は高橋を単に使いやすいかったから名指しし続けたのではないことは、指摘しておきたい。世界中の名士と向き合ってきた犬丸が、高橋を最も信頼できる3人のうちの1人と公言するぐらい<sup>[9]</sup>、高く認めているのである。

#### 東大からの佐野利器とのつながり

——

犬丸との関係が築かれる前の高橋は、東大在学中から佐野利器<sup>[10]</sup>の影響下にあった。これは疑いようのない事実である。

高橋は東大を出る時に恩賜の銀時計をもらった秀才だったが、佐野の差配により不本意ながらもマイナーな滝川鉄筋コンクリート工務所に就職。そのためか1年ほどで同社を辞職し、内務省明治神宮造営局技師に転じた。ここでは外苑の聖徳記念絵画館などの設計監督に従事するが、数年後にはまたもや宮内省内匠寮技師に転職。関東大震災の後、佐野の肝いりで設立された復興建築助成株式会社に就職している。高橋のこの転職のすべてに佐野は関与していて、明治神宮造営局では外苑計画を主導する立場にあり、宮内省では技師として兼務していた。復興建築助成株式会社は、佐野が東京市建築局長として震災復興後の建築の耐火を都市レベルで進めようとした社会政策的建築組織である。このように高橋の職歴の随所に佐野が見えるため、その“子飼ひ”の自律した人間性を見出し難く感じるのも無理はない。

その一方で、高橋は住宅設計やコンペに個人的に取り組んでいる。大正14年[1925]に学士会館懸賞競技設計に一等当選、昭和3年に竣工するとともに、駒場につくり上げた英国式洋館「前田利為侯爵邸」[1928]や前田育徳会の関連施設、平林金吾との住宅設計など、立て続けに手がけている。個人的な活動が順調に続く中、昭和5年[1930]には日本生命館(現・日本橋高島屋)懸賞競技設計にも当選し、都市建築の華も手がけた。新大阪ホテルの依頼も昭和5年である。佐野の門下としての仕事よりも、個人の建築家としての活動が軌道に乗っていく。佐野の影響を逃れて華々しい個人の活動と共に犬丸との仕事に活路を見い出して独立するのだが、実は高橋はけんかっばやいとこがあって、公的な場からつまみ出されたのも事実である。彼は決して寡黙な建築家ではない。

一例に、建築会館の懸賞競技設計[1927]がある。審査会の席上、委員長の中條精一郎が「委員の中に自分に関連のある某氏案を入選せしむる為めに暗躍をした人がある」という発言をして、高橋は二周り年上の中條と一悶着起こしている<sup>[11]</sup>。その某氏案とは高橋と同じ職場にいた矢部金太郎の案であり、中條が非難したのは同僚の矢部案を推す高橋だった。高橋は中條発言に憤慨し、これを失言として糾弾。発言を取り消すまで議事進行を停止させ、発言撤回を取りつけてから矢部案の当選を決定している。高橋はこの騒動をきっかけに「爾後余り(表)に出ない方がよいだろう」ということになったという。それまでも言葉の災いは多かつたらしく<sup>[12]</sup>、自身の置かれた様を“追放”と自嘲的に述べている。こんな性格だから、権威や資本に“盲従”して佐野や犬丸との関係を築いたとは思えない。彼なりの考えがあつてのことなのである。

独立以前の高橋は、芸術作品としての建築だけでなく、社会の器としての建築の可能性も探っていた。震災復興に際し、建築の不燃化だけではなく、空中防備の観点からの復興の在り方を示したり<sup>[13]</sup>、震災復興で商店建築が供給過剰になっていることに懸念を示したりもした<sup>[14]</sup>。

そもそもこの時代は、内務省にしても宮内省にしても、震災後の復興建築助成株式会社にしても、巨大な建築組織がそこかしこに生まれた時期である。建築組織での経験の後、関東大震災後の民間建築、商業建築が立ち始めた東京で個人事務所を設立する建築家は多かった。

高橋は組織の建築家として、個人の建築家として、各々の要請に対して極めて忠実に応えていった建築家だったのではないだろうか。佐野と犬丸との関係から高橋のイメージは他律的に見えた点は否めないが、師匠とパトロンとの関係だけから評価をするわけにはいかない。

#### 育て、協働する設計スタイル——矢部金太郎と平林金吾

——

こうした見方を少し覆すのに、高橋本人が世話をした人物との関係を見たい。高橋のそばにはいつも有能な建築家があったが、彼らは高橋が機会を与えて育てた建築家だった。

先に見た建築会館懸賞競技設計で、高橋は同じ職場の矢部金太郎<sup>[15]</sup>の案を推したが、矢部とは明治神宮造営局の技師時代に出会っていた。その後、高橋が復興建築助成株式会社に移ってしばらくして矢部も入った。その就職採用に高橋の関与はあったであろうし、矢部は当選を機に昭和2年に独立もした。高橋も遅れて独立してからは、川奈ホテルや上高地ホテルの設計でその内装を矢部に委ねたとされる。さらに矢部は高橋とのつながりから犬丸の自邸も田園調布に設計<sup>[16]</sup>するなど、矢部の建築活動の端々に高橋の影響を見てとれる。昭和初期の帝国ホテル解体・増築計画<sup>[17]</sup>では、帝国ホテル会長・大倉喜七郎と共に矢部が欧米のホテル事情の視察に赴いている。まさに高橋の右腕だった。

平林金吾<sup>[18]</sup>も高橋と近い関係にあった。2人は滝川鉄筋コンクリート時代に出会い、高橋が明治神宮造営局に赴任すると平林を技手として引き抜き、高橋が宮内省に移ると再度、平林を引き抜いた。高橋が復興建築助成株式会社に赴いてもまた平林を技師として招くなど、高橋は常に平林に信頼を置いていたことが分かる。平林は大阪府庁(岡本馨との連名)、名古屋市役所、朝鮮貯蓄銀行の設計で名を馳せたが、それぞれ大正7年[1918]、昭和5年、昭和7年[1932]の懸賞競技設計での当選作であり、組織の建築家としての活動の傍ら、高橋同様、個人の建築家としての技量を磨き上げた。高橋は世話されてきただけの受け身の建築家では決してない。

#### 再び帝国ホテルへ

——

戦争中、高橋は朝鮮半島で事業を興していたと言われる。昭和13[1938]年竣工の半島ホテルが契機となって渡鮮したのであろうか。昭和15年[1940]、平壤の郊外鎮南浦に「鎮南浦ホテル」の設計もしていて、朝鮮でもホテル建築家としての名は轟いていたようである。終戦後、帰国し、昭和24年[1949]には事務所を再開。昭和26年[1951]には自身が設計した「西川ビル」に事務所を移転した。ちょうど事務所移転後、帝国ホテルに新館建設の計画が起り、後の「第一新館」[1953]、続いて「第二新館」[1958]の計画が進んだ。

この時、アメリカの『TIME』誌のインタビュー<sup>[19]</sup>を高橋は受けている。高橋はライト館を「リキシャ時代の素敵な設計だった」と述べた。ライトは、高橋が設計した帝国ホテル第二新館の無機質な客室棟を見て、「Gosh awful(ひどい!)」と声を上げたという。帝国ホテルはことあるごとにライト館の破壊もいとわない計画を立て続けたが、ジャンボジェット機時代の到来に向けての新本館計画は、いよいよライト館の取り壊しを伴うものだった。世論の反対を意識してか計画は秘密裏に進められ、昭和42年[1967]、新本館建築計画が表面化、その設計者も高橋だった。昭和42年に組織された「帝国ホテルを守る会」の設立総会は、なんと犬丸が高橋を見出した学士会館で開かれた。高橋は批判を浴びて建築家協会を脱会しながらも、設計・監理を成し遂げ、竣工後、高橋は次のように述べた。

「半世紀に一度あるかないかの一大事業ですからね。そうした一大エポックメイキングに設計者として参画できたチャンスは、身に余る光栄」<sup>[20]</sup>

昭和45年、高橋の設計になる新本館は完成。その年、高橋は京都で倒れ、帰らぬ人となった。

すなもと・ふみひこ——広島国際工学部住環境デザイン学科准教授/1972年生まれ、豊橋技術科学大学大学院修士課程修了。

博士(工学)。専門は都市・建築史。

主な著書:『近代日本の国際リゾート——一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』[青弓社/2008]、『図説 ソウルの歴史—漢城・京城・ソウル 都市と建築の六〇〇年』[河出書房新社/2009]、『社宅街—企業が育んだ住宅地』[共著、学芸出版社/2009]、『レジャーの空間—諸相とアプローチ』[共著、ナカニシヤ出版/2009]、『近代日本の郊外住宅地』[共著、鹿島出版会/2000]など。



鎮南浦ホテル | 和洋30室、大ホールなどを備えるなど、設計は完成していたが、資金調達、資材難で建設が見送られ、実現には至らなかった[出典:「興亜の一翼—伸びゆく鎮南浦」[鎮南浦商工会議所/1940]]



#### 帝国ホテル

上——第二新館:それまでのライト館とは全く異なるデザイン。客室数を大幅に増加させた[絵はがきより]

下——新本館[竣工記念冊子より]

[15] 矢部金太郎[生年不明-1976]

東京美術学校図案科卒業。明治神宮造営局を経て、大正末期に田園調布の開発にかかわる。建築会館懸賞競技設計で一等。戦後は地元の静岡で公職などに就いた。代表作に田園調布駅などがある

[16] 田園調布の開発計画に矢部はかかわっており、彼の設計作品も多くなる。おそらく、そうした関係から犬丸の自邸は田園調布に構えられたものと推察される

[17] 帝国ホテル解体・増築計画とは、1940年の東京オリンピック誘致計画を念頭に1936年頃に持ち上がった増築計画である。1923年に竣工したライト館は、客室207室、大量の外国人が訪れることが期待されたオリンピックには太刀打ちできる規模ではなかった。そこで、日比谷公園側の20室程度を解体し、8階建て、300室の客室棟を増築しようとしていた。この時の設計の担当は高橋である。高橋に対し、ライトの愛弟子にあたり、ライト館の設計にもあつた遠藤新は「大倉男は帝国ホテルを増築なさるといふ、世を挙げてオリムピック招致に懸命なる折柄、時宜を得たものとして誰しも異論がない。ただその増築が噂の如く現ホテルの一部を破壊し、全体の調和を顧慮する所なく、日比谷公園側に障壁の如く建つものとするれば、多に異論なきを得ない。(中略)高橋君は、建築家として自ら擯(は)からず調和を破るが如き不遜を敢てせらるるのとは、徒らに資本家に聽従して、斯界の大先達に敬意を失するの跡)と共に、建築家の矜持と徳義において甚だ間然とする所がある。(中略)日本建築界の(舉)こつて慥(うら)みとする所である。[出典:「新建築」1936.7]と本計画に憤慨している。結局、この解体・増築計画は資材の高騰や時局の悪化により1938年に中止。オリンピック計画も返上された

[18] 平林金吾[1894-1981]

東京高等工業学校建築科卒業

[19] 『TIME』1958.8.11

[20] 「帝国ホテル開業パフレット」[1970]所収の座談会の中の発言



## 学士会館

竣工年:1928年(旧館)

所在地:東京都千代田区神田錦町3-28  
規模:地下1階、地上4階|構造:SRC造  
国登録有形文化財



2



3



4



5

1—旧正面玄関:高橋は、学士会館を「大家族の一家  
庭の如き親しみと落付き」を持たせるため、1階を「会  
員の居間」、2階を「御客用」、3階を「書斎」、4階を「寝室」と  
見立てて、「住宅に於ける間取と気持とを其儘」に「アット  
ホーム」になるよう設計したという。くり抜いたような半円  
アーチをくぐって入るこの玄関が建物の大きさに比して  
小さいのは、会員が戻るべき家の感覚を演出しようとし  
たためなのだろう

2—南西面外観:スクラッチタイルを張った外装は当時  
の流行スタイル。コーナーを丸くとしたマッシュ、かつシン  
プルな外観。だが、上部に行くに従い絞り込んでいく開  
口は最上階で小刻みなアーチの二連窓となって、建物全  
体に上昇感も与えている。学士会館は学士会員に対

する懸賞設計競技で設計案が求められた。それ以前の  
建築案は岡田信一郎が設計。岡田案は関東大震災を  
契機に構造計画などの要因から廃案とされてしまった

3—談話室(現・レストラン):かつて会員がめいめい集  
まって談笑した談話室。その奥にライティングルームも設  
けられていた【提供:学士会館】

4—大食堂(現・宴会場(201号室)):2階の大食堂は、  
「御客用」フロアの中心的空間。壁面にオーケストラブ  
ースがある

5—1階広間の柱:人造石張の柱。鉄で張っている  
ことを強調していて、ウィーンのセセッション様式の影響が  
うかがえる



## 前田利為侯爵邸

竣工年:1928年

所在地:東京都目黒区駒場4-3-55 目黒区立駒場公園内  
規模:地上2階 | 構造:RC造  
東京都指定有形文化財



2



3



4

1—西面外観:尖りの多いにぎやかな稜線にスクラッチ  
タイルを張った外観、玄関ポーチはチューダーゴシック様  
式の特徴である扁平アーチとなっていて、ずっしりとした  
感じと軽やかな雰囲気と同時に演出されている  
2—階段広間:三連窓が並ぶ階段の足下にイングルス  
ック(暖炉側の小スペース)が設けられている。暖炉を見  
せていて誰かを誘い込んで談笑したくなる空間だが、そ  
れにしては天井が高く階段広間に対して大きく開いて  
いる。この階段広間は広くそのまま玄関に連続し、か  
つ応接室にもつながる連続的配置であることから、この

イングルスックも大きめに開いたのだろうか  
3—大食堂:サロンに続く大食堂は腰板が高くまで張  
られた格式高い空間。中央にある暖炉は扁平尖りアー  
チで、そのまわりは金唐草紙で装飾されている。だが、  
現在は金色が落ちている  
4—応接室:庭につながるテラスに向けて、掃き出し扉  
で室を外部に開いている。この建物は玄関から階段広  
間へとつながるメインの軸線を持っているが、同時にテ  
ラスから建物内に直交する軸線も設定されていて、その  
演出は玄関広間の双子柱によって中まで入り込んでいく



## 川奈ホテル

竣工年:1936年

所在地:静岡県伊東市川奈1459  
規模:地上3階|構造:RC造



2



3



4

1—サンバラー:円弧を描く開口に取り囲まれ、川奈の明るい風景を室内化した空間

2—東面外観:戦前、伊豆は「東洋のリビエラ」と呼ばれ、その外観も明るいスパニッシュ風になった。空に高くそびえる望楼はかつて入母屋造の和風だったが、それは国際観光局が「和風を加味しろ」と設計過程で注文を付けた結果。ここを訪れた外国人の目には、望楼が和風だけで「川奈ホテルは和風テイストだ」と感じたという

3—メインロビー:海を臨むテラスに向けて大きく開く。玄関とは区別して半個室化されているため、川奈の雄大な景観と一体化する。ロビーに加え、談話室、読書室、レストランなどパブリックスペースがゆったりと計画されているのも川奈ホテルの特徴

4—メインダイニング:平面の軸を振って角度をつけ、ひと味異なる眺めを獲得している



1



2

懸賞競技設計

帝国ホテルとの仕事が軌道に乗る以前は、高橋は積極的に懸賞競技設計に応募している。クラシカルな構成から折衷的な様式まで加味することができる建築家だった

1—日本放送協会関西支部局舎設計競技圖案佳作透視図:角地に合わせたスリムラインと昇降部のデザインが際立つ。当選は渡辺仁、佳作は他に安井武雄、山下寿郎ら[出典:「建築と社会」1933.2] | 2—日本生命館一等当選案透視図:懸賞競技設計の時の当選案。当選案は破風を見せている分、より一層、和風の印象が強い[出典:「日本の建築 明治大正昭和8 様式美の挽歌」伊藤三千雄・前野義著[三省堂 1982]] | 3—東京市庁舎高橋貞太郎案透視図:コンペ要綱に空襲対策が盛り込まれた競技設計。審査委員長は伊東忠太[出典:「日本の建築 明治大正昭和8 様式美の挽歌」]

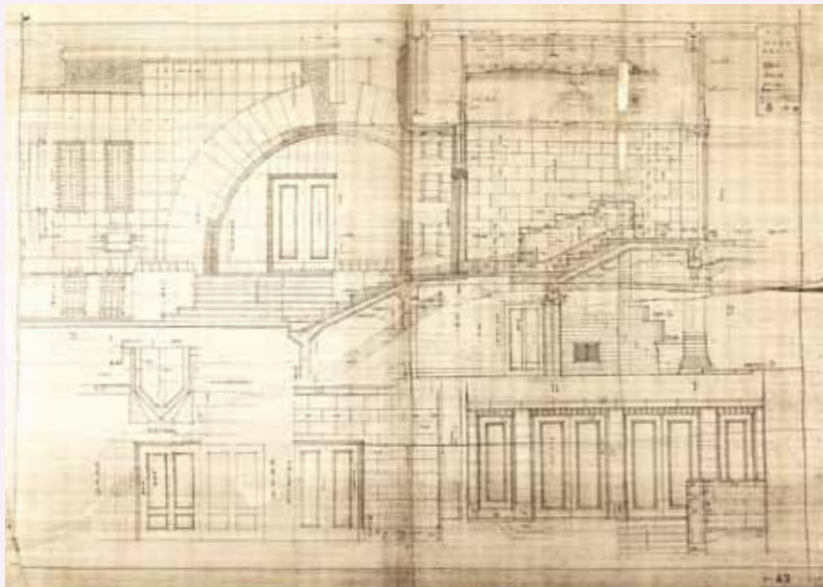


3

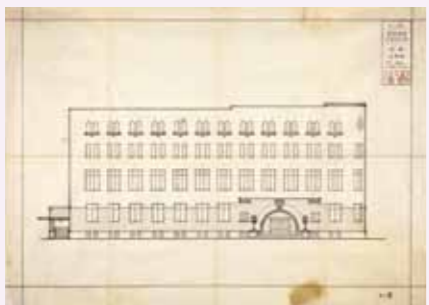
学生会館新築設計図

学生会の会員に向けた懸賞競技設計で当選を勝ち取った高橋は、佐野利器の一言、「君にしてはプランが非常に拙い。やり直せ」によって当選案の大幅な変更を迫られた。再三再四の考案の果て、外観の基本構成は懸賞競技設計案とほとんど変わらないが、南側にあったアーチ状の玄関は西側に移され、内部の平面構成を大きく変えて、現在に至る

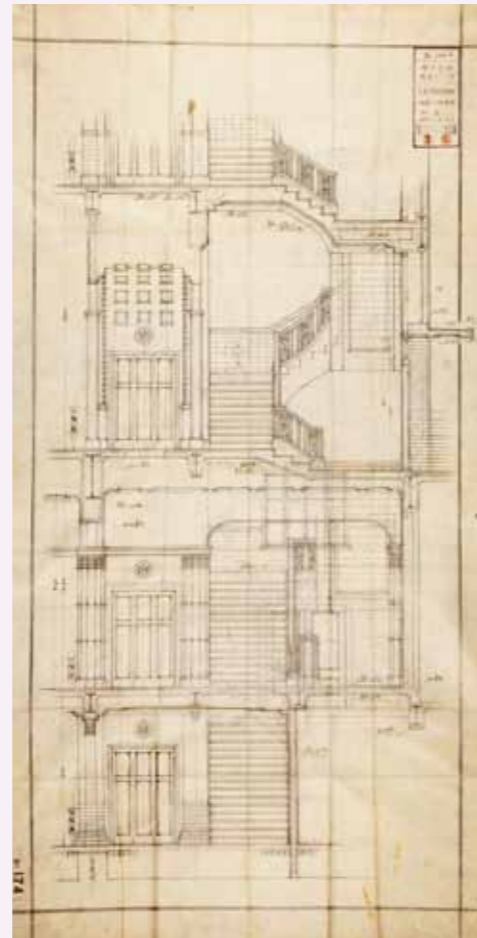
4—正面玄関詳細図[1927]:アーチは日ノ出石、建物低層部は富国石という人造石を張っている。セセッションの影響がうかがえる | 5—正面立面図[1926]:図面作成日は「大正15年5月15日」で、設計は高橋、校舎は佐野、製図に平林の印影を見ることができる。当時、高橋は復興建築助成株式会社の技師、平林は東京市臨時建築局の技師であった | 6—主要階段詳細 地階-2階断面[1927]:地下階から3階に至る階段。「御客用」の2階の階高が高めにとられていることが分かる[所蔵:学生会館]



4



5



6



7



8

7—卒業設計「学生集会所」正面立面図面[1916] | 8—同断面図[所蔵:東京大学大学院工学系研究科建築学専攻]

明治25年[1892]	6月26日、滋賀県犬上郡彦根町字職人町に、父・安吉、母・貞の長男として生まれる。母方の前川家の分家である高橋姓を継ぐ				
明治43年[1910]	彦根中学卒業。第三高等学校入学				
大正5年[1916]	東京帝国大学工科大学建築学科卒業。優秀なる成績をもって恩賜の銀時計を拝受する。卒業設計「学生集会所」。佐野利器の紹介により滝川鉄筋コンクリート工務所に技師として就職。帝国製麻淀川工場、札幌工場などを担当。滝川鉄筋コンクリート工務所で平林金吾に出会う	大正10年[1921]	宮内省内匠寮技師になる。英国皇太子来日に備えた赤坂離宮改修や新宿御苑洋館増築工事などを担当。また、東伏見宮邸、学習院物理学教室、秩父宮邸などを手がけた	『建築学会パンフレット』第5輯第7号で「ホテル建築」について論じる(復興建築助成株式会社技師長の立場で)	
大正6年[1917]	滝川鉄筋コンクリート工務所に合わず、退職。内務省明治神宮造営局技師。外苑計画は佐野が主導していた。聖徳記念絵画館(原設計:小林正紹)設計監督などに従事。この時、矢部金太郎に出会う	大正11年[1922]	英国よりMVO(member of victrial order)勲四等を授かる	昭和10年[1935]	山下寿郎設計の名古屋観光ホテル設計案に、犬丸と共にホテル建築としての部分修正を行う
大正7年[1918]	平林金吾を内務省明治神宮造営局に技師として引き抜く	大正14年[1925]	前田利為邸の設計依頼を受ける。学士会館懸賞競技設計に一等当選。佐野が設立に尽力した復興建築助成株式会社の技師として就任	昭和11年[1936]	帝国ホテル「ライト館」の一部解体・増築計画が起こる。それに関して、遠藤新から「資本家に聴従して、斯界の大先達に敬意を失する」と、東京朝日新聞紙上で批判を受ける
大正8年[1919]	『建築世界』『建築雑誌』誌上で、議院建築の懸賞設計当選・入選図案と審査会に対して激しく批判を展開する	昭和2年[1927]	建築会館懸賞競技設計で審査委員。審査委員長の中條精一郎と一悶着を起こす。当選は、当時、高橋と同じ職場だった矢部金太郎。平林金吾を復興建築助成株式会社の技師として引き抜く	昭和24年[1949]	事務所を再開
大正9年[1920]	聖徳記念絵画館設計工事の進捗にさしかかった頃、竹中藤右衛門らと共に規格木造住宅の研究のために渡米。佐野の差配があったと言われる。しかしアメリカ到着後、本企画は中止となり、アメリカ建築界調査事項報告会をニューヨークで実施し、その後、欧州経由で帰国	昭和5年[1930]	震災復興において商店建築ばかりが建設される現状を批判する文章を『建築世界』『建築画報』に立て続けに記す。日本生命館懸賞競技設計が開催され、高橋が当選。犬丸徹三から大阪の新ホテル計画の設計依頼を受ける(後の新大阪ホテルの基本設計)。7月、復興建築助成株式会社を退社。高橋建築事務所を開設	昭和27年[1952]	帝国ホテル新館建設の計画が起こる(後の第一新館)
		昭和7年[1932]	日本放送協会関西支部局舎設計競技佳作。『高等建築学17 工場』を著す	昭和30年[1955]	帝国ホテルにさらなる新館建設の計画が起こる(後の第二新館)
		昭和8年[1933]	『高等建築学16 商店・百貨店』を著す。	昭和31年[1956]	第二新館の計画に際し、犬丸と高橋はアメリカで最新ホテル建築の見学を実施
				昭和33年[1958]	米紙『Time』は、帝国ホテル第二新館の“最新ぶり”の完成写真を見たライトの驚嘆を伝えるとともに、高橋がライト館を「リキシャ時代の素敵な設計だった」と述べたことを報じる
				昭和42年[1967]	帝国ホテルライト館の取り壊し、新築が騒動となり、高橋は批判の矢面に立たされる
				昭和45年[1970]	10月1日、逝去(78歳)

主な作品 | Works | ●印は現存 | \*印は所在不明

昭和3年[1928]	前田育徳会書庫・什器庫・事務棟(東京)   某邸(平林金吾と共同設計)*   学士会館●(佐野利器と共同設計、東京)   前田利為侯爵邸●(塚本靖と共同設計、東京)	昭和10年[1935]	新大阪ホテル(基本設計、大阪)	昭和32年[1957]	西本願寺志納及接待所*
昭和4年[1929]	三井高長邸(東京)   青松寺本堂(東京)	昭和11年[1936]	川奈ホテル●(矢部金太郎が内装に関与していたと言われる、静岡)	昭和33年[1958]	帝国ホテル第二新館(東京)
昭和5年[1930]	服部時計店●(基本設計、東京)	昭和12年[1937]	赤倉観光ホテル(新潟)	昭和35年[1960]	滋賀銀行京都支店(京都)   芝パークホテル新館・宴会場(東京)   京都女子学園(京都)
昭和8年[1933]	服部金太郎邸●(東京)   日本生命館(現・日本橋高島屋)●(片岡安と共同設計、前田健二郎も関与、東京)   上高地ホテル(矢部金太郎が内装に関与していたと言われる、長野)   三井物産大阪支店(大阪)	昭和13年[1938]	N氏邸(東京)   半島ホテル(朝鮮)	昭和36年[1961]	山一証券新潟支店(新潟)   山一証券赤羽支店(東京)
昭和9年[1934]	久保田証券ビル*   吉村氏邸(前田健二郎と共同設計)*	昭和14年[1939]	ニューパークホテル(基本設計、宮城)   高島屋京都店(計画のみ、京都)	昭和39年[1964]	京都女子学園家政学教室(京都)   山一証券三軒茶屋支店(東京)   彦根市市民福祉会館(滋賀)   浜松町モノレール・ステーション(東京)
		昭和15年[1940]	鎮南浦ホテル(計画のみ、朝鮮)	昭和45年[1970]	帝国ホテル新本館●(東京)
		昭和26年[1951]	西川ビル(東京)		
		昭和27年[1952]	滋賀銀行東京支店(東京)		
		昭和28年[1953]	日本出版販売株式会社*   帝国ホテル第一新館(東京)		
		昭和31年[1956]	芝パークホテル(東京)		

取材協力: 学士会館/川奈ホテル/東京都教育庁地域教育支援部管理課文化財保護係/目黒区都市整備部みどり公園課公園管理係  
 参考資料: 『日本の建築 明治大正昭和8 様式美の挽歌』伊藤三千雄・前野堯著[三省堂/1982] | その他: 特記のない写真は振り下ろしです  
 次号予告: 『INAX REPORT No.186』の「続・生き続ける建築」は堀口捨己です